

- 1 澄む川に沿うて酒蔵十ばかり
- 2 登高や頂にして乳やつて
- 3 牛乳瓶雨月の雨のたまりをり
- 4 鯉跳んでいよいよ月の待たれけり
- 5 月の客三歳にして伊予訛
- 6 幾ら何でも笛下手すぎる良夜かな
- 7 書架高し月の天井近きまで
- 8 車窓より月のさし込む忘れ物
- 9 あつまりて大きな露が葉の付け根
- 10 被爆せし松におほきな猿茸（ましらたけ）
- 11 通帳を探しながらも芋煮るよ
- 12 ギターもて歌はんか芋煮ゆるまで
- 13 無事来られたるが何より鯿飛べり
- 14 草の香をさせて戻りてもう寝しよ
- 15 新藁の山の崩れて降りつづく
- 16 霧の野をはるばると来て傘壊れ
- 17 澄む水をかためてさしみこんにやくよ
- 18 お別れはいつも橋にて紅葉鮎
- 19 茸狩の人やリズムジンのぞき込み
- 20 おひねりが飛ぶ豊年の湯治場に
- 21 茸飯炊けば炊けたるだけ売れて
- 22 炬燵欲し炬燵欲しとて自転車漕ぐ
- 23 綿虫が降り消防署事もなし
- 24 座布団の煙草臭きが狩の宿
- 25 狩の宿掃除するからそこをどけ
- 26 アコーデオンの冬の空気を吸うて吐き
- 27 寒し寒し集合写真早う撮れ
- 28 夜神楽や熱きコロツケ懐に
- 29 かつて蔵今はしぐるる井戸のみぞ
- 30 毛利氏に滅ぼされたる山眠る
- 31 ぢき嫁ぐ妹にして炬燵に寝
- 32 滲みたる時雨の葉書届きけり
- 33 蛸吊し束子を吊し冷えわたる
- 34 白息につつまれ笑ひあひにけり
- 35 雨音の止みしは雪に変はりしか
- 36 脱ぎしものしかと畳みて風邪を病む
- 37 暮市のくさぐさを傘さしたまま
- 38 年の瀬の盥せましようなぎども
- 39 暦買ふ筈がでつかきソファ買ふ
- 40 船板の反りを机に年惜しむ
- 41 餅間の朝のしづかな色町よ
- 42 切符吸ふ黒く冷たき機械かな
- 43 冬帽を脱がん脱がんと赤ん坊
- 44 風邪の眼の開きて何も見てをらず
- 45 弁当に箸のみじかや冬菫
- 46 銅像の眼鏡ごつき紀元節
- 47 列車待つ鼻の奥まで冴返り
- 48 積木つむ音をちひさく春の雪
- 49 世話役は飴配りをり農具市
- 50 その指で太刀持てまいぞ男雛

- 51 春寒し新聞に紐食ひ込みて
 52 鶯に覚めず大きな犬である
 53 雑巾は水を濁らせ春の風
 54 いそぎんちやく何か食ひをる朝寝かな
 55 船神様に自転車預け磯菜摘む
 56 まちがへて嘔む春愁の口のなか
 57 目刺焼く電車通れば窓鳴つて
 58 春ともし婚儀のあとの庭ひろく
 59 武者役も清盛役も春炬燵
 60 宇野千代の生家小さき蠅生まれ
 61 畑に水撒いては蝶をおこすかな
 62 入学式終るや目張釣に駆け
 63 花衣みごもりしとは見えざりき
 64 若草に障子の滑り良かりけり
 65 春うれひなどまだ無くて電車好き
 66 穴ひとつ水面に開くが蝌蚪の口
 67 春炬燵買うて程なく逝かれしよ
 68 母を焼く煙かぼそし藤の雨
 69 山蟻や露天湯の淵のぞき込み
 70 夏帽の中に名前を大書かな
 71 涼しさやつながり淡き季語置いて
 72 蓼むしる気に入らぬことあるらしく
 73 山蚕よりさみどりの糞うまれけり
 74 すててこで屋根に登つて何する気
 75 汗にほふ少し牛乳石鹼も
- 76 蝉生まれよちのぼりゆく法学部
 77 付録なる浮輪に雑誌膨らめる
 78 考へることを止めたる葛饅頭
 79 送り梅雨墓の移転のお知らせが
 80 お財布の紐がぶち切れ梅雨が明け
 81 みごもりし腹よ日傘の影より出
 82 泣きわめきついでに汗の噴き出しぬ
 83 炎天や鞆の底に本ひしやげ
 84 新しき疊に汗の引きにけり
 85 涼しくて髭ある魚に親しめる
 86 びしよ濡れの釣銭もらひ金魚釣
 87 風死すやハム窮屈に箱の中
 88 片陰をはみ出て何を読み入るや
 89 混み合うて盂蘭盆近き銀行よ
 90 背の子の花火臭さよわれもまた
 91 ロープウェイ残暑の街を離れけり
 92 ちんちろりんちん嘘のよな訃報かな
 93 大揺れや二百十日の洗濯機
 94 秋の日に透けて鷗の翼に骨
 95 ひぐらしに帰り着きけり長き旅
 96 稲妻に鼻と呼ぶるる岬あり
 97 秋の蚊を打ちて途切る話かな
 98 道譲る秋の彼岸のさはがにに
 99 姉妹かぼちやの出来をほめ合うて
 100 菜を売るや爽かに爪切り揃へ